Japanese Association for Religious Studies

宗教からみる日韓の文化交流
――キリスト教と新宗教を手がかりに――

李　賢京

日本と韓国は歴史的に深くつながり、社会・文化的な交流は非常に活発であった。しかし、戦前の日本による韓国の植民地支配によって、両国は「近くて遠い国」になってしまった。

ところが、戦前から韓国には日本の新宗教が移入され、多くの韓国人が日本の新宗教の信者になっている。近年では、日本本部によって韓国支部の設置や法人登録がなされ、日本の新宗教教団の活動が積極的になっている。一方、日本では、大都市を中心として、韓国に本部を持つキリスト教会が教勢を拡大している。

まず、現代の日韓における宗教状況を見てみると、韓国では、人口の過半数以上が宗教人口であり、そのほとんどはキリスト教と仏教で占められている。キリスト教と仏教は多く分派されている。その他に、新宗教はキリスト教や仏教に比べてかなりその教勢は小さい。これに対して、日本は、『宗教年鑑』では人口の二倍となる人々が宗教を信じている数値が示され、その多くは神道系と仏教系であり、そこには新宗教も含まれている。信者数は既成宗教集団のそれよりははるかに多い新宗教集団もある。これは韓国で新宗教が低調している状況とは大きく異なっている。日本のキリスト教人口は、韓国に比べて非常に少ない。一方、両国は仏教信者が多い点に関しては共通する。しかし、なぜ、韓国では新宗教が教勢を拡大することができなかったにも関わらず、日系新宗教は成長することができたのであろうか。また、なぜ日本ではキリスト教が伸展できなかったにも関わらず、近年、韓国系キリスト教会が多く設立されるようになったのであろうか。

こうした現代の日韓における宗教文化の交流の背景には、両国で同様に起きている現象がある。その一つに、「カルト問題」「似而非（さいび）問題」がある。一九九〇年代以降、日本では「オウム真理教事件」、「法の華三法行事件」、「ライフスペース事件」などの宗教による反社会的事件が生じた。韓国でも一九九〇年代を前後として「五大洋事件」「天尊会事件」などが生じた。このように、近年、日韓両国では同時期に宗教による社会問題が続発した。しかし、その一方で、日韓両国では宗教の相互受容も活発に生じてきている。そのため、現代の日韓の比較宗教研究は非常に重要な課題となっている。

こうした問題意識から、日韓における宗教文化交流を理解するために、①布教・宣教戦略からのアプローチと、②宗教市場論からのアプローチを通じて、日本と韓国の宗教市場では、自文化にない宗教的要素（＝宗教財）を提供する外来宗教を通して、自らの宗教的ニーズ（宗教的救済）を満たし得ようとする「相補性（complementarity）」の関係が現れていると考える。多様な宗教財を自由に選択できる日韓両国において、自文化にない要素を相互国の宗教が提供することによって宗教市場での活発な消費活動が促されているのである。言い換えれば、日韓両国は相互に、自由な宗教市場において、比較優位にある魅力

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

的な宗教商品を宗教交流という国際貿易によって相補的関係に基づいて交換しているのである。日本における韓国系キリスト教の受容・拡大は、日本には無い韓国のキリスト教が有する特性がそこに存在している。また、韓国における日系新宗教の受容・拡大は、韓国には無い日本の新宗教が有する特性が存在しているのである。したがって、今日の日韓の宗教文化交流を宗教市場論によって両国の相補的関係を明らかにすることで、日韓相互における宗教の拡散状況を説明することができると考える。

日本産ブラジル系プロテスタント教会信者のブラジルへの再適応

山田政信

移民と宗教をテーマとする研究において、東海地方の諸都市を中心に集住するブラジル人デカセギ者の日常生活における宗教活動の具体相とその意味にかんする調査研究は未だ十分とは言えないが、その一方で帰国した元デカセギ信者らのブラジルへの再適応を宗教的側面から明らかにすることは重要なテーマである。

筆者のこれまでの調査によれば、ブラジル人自身が設立したプロテスタント教会（日本産ブラジル系プロテスタント教会）はその設立の経緯から次の四つに分類できる。①日本産ブラジル系教会：デカセギが独自に日本で誕生させた教会。②海外宣教型ブラジル系教会：ブラジルの教団が海外宣教の一環として開いた教会。③ブラジル系提携教会：教会を設立する際にデカセギがブラジルに本部を置く教団と提携を結び、その下部教会として誕生させた教会。④ニッケイ教会：移植されたブラジルの日系エスニック・チャーチ。本稿は、④のタイプのホーリネス教会を事例に、デカセギ信者の日本における活動と帰国した人々のブラジルでの宗教活動への再適応を信者ネットワークに着目しながら考察する。

ホーリネス教会は中田重治らを中心に一九一七年に日本で設立された。ブラジルには信者が一九二五年に出稼ぎ移民として渡伯し、同年宣教目的で渡った物部赳夫を中心として日本人社会に伝えられた。日本でホーリネス分裂事件が起こった翌年（一九三四年）、ブラジルの信者の群れはブラジル・ホーリネス教会として独立した。そのため、デカセギ信者は日本の教団とは独自の活動を展開している。ブラジルでは日系人社会に定着したエスニック・チャーチとして知られ、日系人の集住する南東部地域を中心に約四十か所の教会・伝道所を開き、信者数は約四千人、ニッケイ教会では最大規模の教団である。近年では南東部以外の諸教会で非日系人信者が増えている。元来、ペンテコステ派の流れを汲むものの、集会の雰囲気は静かで大人しく伝統的なスタイルが踏襲されている。他の日本産ブラジル系プロテスタント教会の多くはペンテコステ派だが、ホーリネス教会はそれとは異なり極めて保守的かつ日本的な（ニッケイ）アイデンティティが共有されている。

日本では一九九五年にデカセギによって組織化が開始され

NII-Electronic Library Service